様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24 年　4 月　12 日現在

機関番号：１２６０６
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2009～2011
課題番号：２１６５２０１４
研究課題名（和文）　美術とスポーツにおける身体観の相違についての理論的・実践的研究

研究課題名（英文）　Theoretical and practical research about body from the viewpoint of art and sports

研究代表者
児美川　佳代子（KOMIKAWA KAYOKO）
東京芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：50292800

研究成果の概要（和文）：美術とスポーツにおいて、技術の習熟や行為の遂行において、身体への見方がどのように影響しているかを明らかにすることを目指した。実践研究では、スポーツ選手に人体クロッキーを描いてもらうことで、スポーツ選手の身体観を考察した。理論研究では、実践研究の分析とともに、美術とスポーツの比較から両者の共通点と差違について多角的に検討し、美術制作行為及び美術の学びの特質を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：We have researched the influence of body knowledge upon learning skills and performance of art and sports. As practical research we have analyzed the body scheme of athletes by their drawing of human body. Theoretically we have clarified the characteristics of artistic execution and its learning through both the common and different aspects between art and sports.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２００９年度	500,000	0	500,000
２０１０年度	1,000,000	0	1,000,000
２０１１年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,200,000	210,000	2,410,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：芸術学　芸術学・芸術史・芸術一般
キーワード：美術教育、美術解剖学、身体、ラグビー、感性教育

１．研究開始当初の背景

(1)美術は、スポーツと同様に身体的活動であるにもかかわらず、これまで別々に研究されてきた。スポーツは生理学や心理学などといった自然科学との結びつきを強め、他方美術教育研究は学校教育や社会教育における美術制作や鑑賞行為の方法分析を中心として行われてきた。こうした状況に対し、美術とスポーツの共通点を探ることで、身体を含めた総合的な感性教育という新しい美術教育観を打ち出すことを目指した。

(2)スポーツ科学や栄養学などにもとづく科学的スポーツトレーニングが隆盛するなかで、そうした研究では捉えられない、身体的活動におけるイメージ感受やイメージ生成という側面を捉えることを目指した。身体をめぐる具体的な美術活動を通じたイメージ変容を捉えることで、自他の身体に対する見方・感じ方を変容させていく独創性あるプログラムの構築を目指した。

(3)現代日本の子ども・若者の「からだのおかしさ」がつとに指摘されている。それは血圧や体温といった人間の生命維持にまで及ぶ危機的状況になりつつある。また情報化社会の進行や社会的人間関係の変容によって、生きることのアクチュアリティが希薄化しているという問題も生じている。美術とスポーツを身体というレベルから問い直す本研究において、身体観や他者認識を育てるプログラムを構築することで、「生きる力」を身体や感性を含めて総体としてゆたかに育てる教育の方向性を見出すことを目指した。それは、既存の教科にとらわれない総合的な美術教育の可能性を見出すことにもなると予想した。

２．研究の目的

(1)理論研究としては、美術とスポーツの共通点と差違について、先行研究を検討し、美術制作に関する理論的考察によって、美術制作行為や美術における技術の習得の特質を明らかにする。それを、スポーツ活動における身体やイメージの変容過程と比較することで、美術とスポーツの身体観の相違を理論的に明らかにする。また実践研究の成果を検証することで、スポーツと美術に共通するイメージを介した身体的活動の変容過程を理論的に分析する。

これまで知育・徳育・体育という形で分節されてきた教育のとらえ方を根本的に問い直し、単なる情操教育にとどまらない美術の人間形成的意義を明らかにする。

(2)実践研究としては、スポーツ選手に対する美術プログラムを実施し、スポーツ選手の身体観の深化を捉える。身体をめぐる具体的な造形活動によって、これまでのスポーツ研究には全くない、イメージを介した身体理解という新しいトレーニング手法を見出す。また、スポーツ選手の造形活動の変容と比較考察することで、美術における学びの特質を明らかにする。理論研究と往還することで、スポーツ選手の身体理解にとって有効なプログラムを構築する。

３．研究の方法

(1)理論研究としては、美術制作者・美術解剖学研究者・教育学研究者・スポーツ科学研究者等によって構成される研究会を、１～２ヶ月に１回程度の頻度で組織し、美術とスポーツにおける身体観の相違について検討した。先行研究の検討はもとより、それぞれが実践に即して進めている理論的研究を発表して議論し、美術とスポーツの身体観について相互に理解を深めた。特に美術解剖学の知

見に学びながら、スポーツ選手に向けた美術プログラムの枠組みを構築した。
(2)実践研究としては、ラグビーのユース世代トップ選手及びその指導者に向けて、美術教育プログラムを実施し、そこで生じていることを美術制作者が参与観察して、理論的に分析することで美術とスポーツの身体観の相違について考察を深めた。具体的には三つの大学トップレベルのラグビーチーム、７人制女子ラグビー日本代表候補、トップ指導者に対して、デッサン、針金での人体模型制作、模写、写真などの美術プログラムを実施した。

４．研究成果

(1)実践研究を通して、美術によって身体への意識化が促され、自己の身体だけでなく試合をする相手の身体の重心などを捉えることが容易になることが明らかになった。最も有効なプログラムは、人体クロッキーであることも明らかになった。人体については、すべての人が既存のイメージをもっているにもかかわらず、見慣れているために先入観なく見ることが難しい対象である。また、単純な道具でできる割に、専門的示唆がないとモデルの形を捉えるのは難しく、イメージの変容が明確に表出されることが明らかになった。
(2)スポーツ選手の描画分析から、内的イメージと身体の動きによって表出される描画のズレが、美術制作者のアドヴァイスを受けながら何度も描いていくうちに、次第に照合されていくことがわかった。これは、河本英夫が概念化している「遂行的イメージ」が形成されたということを示しており、この点が、美術とスポーツの共通点として明らかになった。
(3) スポーツ選手に向けた美術プログラムを重ねることで、身体的行為そのものと行為の結果とを切り離すことができないスポーツに対して、行為の結果である痕跡が、作品として自立する美術制作との違いが明確になった。スポーツは行為とその結果とが密接に結びついているために、行為終了後にビデオ等で教えることが難しく、その場で身体活動とイメージとが一致していくような学びが必要だということが明らかになった。逆に、美術制作の場合、行為の痕跡を検証することが容易であるが、しかし作品として自立してしまうために、制作者と行為の痕跡たる作品との間に齟齬が生じる。それがさらなる自己形成を誘発するとともに、美術作品が人に感動を与えることができるのは、作品として自立したものにおいてなお、制作者の行為が鑑賞者に感じ取られることによるということが明らかになった。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①佐々木康、勝田隆、上野裕一、山本巧、枠貴洋、山下修平、小松佳代子、河野一郎、国際競技力向上の経済情報マネジメント、体育経営管理論集、査読有、第３巻、第１号、2011, 27-35
②小松佳代子、岩出雅之、木村季由、内山達二、上野裕一、「見る力」を育てる－身体知を育てる５つの力－、ラグビー科学研究、査読無、Vol.22、No.1、2010、9-15

〔学会発表〕（計２件）

①小松佳代子、上野裕一、Vision Development of Youth Rugby Players through Art Education, WCSF Ⅶth World Congress on Science & Football 2011（口頭

発表）2011 年 5 月 27 日、名古屋大学
②小松佳代子、屋宜久美子、スポーツ選手に対する美術教育実践の試み―美術における学びの意味を考えるために―、美術教育研究会第 16 回大会（口頭発表）、2010 年 11 月 7 日、東京芸術大学

〔図書〕（計 3 件）
①東京藝術大学美術教育研究室編、美術と教育のあいだ、東京藝術大学出版会、2011、309 頁、猪瀬昌延「彫塑制作におけるミメーシスの循環」25-50、生井亮司「表現する身体・生成する自己」207-237、宮永美知代「人のかたちの学びから美術制作へ」255-268、青柳路子「絵を描くこと　いのちを描くこと－「発達」をめぐって－」269-279、小松佳代子「つくることと生きること－美術と教育の交叉－」280-297
②上野裕一、小松佳代子、楕円の学び－よりよい指導者の養成を目指して－、叢文社 2010、191 頁
③佐々木康、スポーツ映像論－闘野の思考－創文企画、2010、182 頁

６．研究組織
(1)研究代表者
児美川　佳代子（KOMIKAWA　KAYOKO）
東京芸術大学・美術学部・准教授
研究者番号：５０２９２８００

(2)研究分担者
佐々木　康（SASAKI　KOH）
名古屋大学・総合保健体育科学センター・教授
研究者番号：００１８３３７７
宮永　美知代(MIYANAGA　MICHIYO)
東京芸術大学・美術学部・助教
研究者番号：７０２００１９４
青柳　路子（AOYAGI　MICHIKO）
東京芸術大学・美術学部・講師
研究者番号：７０４６６９９４
生井　亮司（NAMAI　RYOJI）
武蔵野大学・教育学部・講師
研究者番号：２０５８４８０８
猪瀬　昌延（INOSE　MASANOBU）
信州大学・教育学部・准教授
研究者番号：４０５９７３４０

(3)連携研究者
上野　裕一（UENO　YUICHI）
流通経済大学・スポーツ健康科学部・教授
研究者番号：５０２２３４９１
本郷　寛（HONGO　HIROSHI）
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：００１９０２６５
木津　文哉（KIZU　FUMIYA）
東京芸術大学・美術学部・教授
研究者番号：８０１７７８２３